

2026年度第5回(10月)北辰テスト対策予想問題

国語(制限時間50分・100点満点)

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

中学三年生の美緒(みお)は、文化祭で行うクラス演劇の主役のオーディションを受けたが、主役は親友の千夏(ちなつ)に決まり、美緒は照明係を担当することになった。

「主役、伊藤千夏さん」

放課後の教室に、担任の先生の声が響いた。まばらな拍手の中で、①おめでとう、と言った自分の声が、自分のものではないみたいに遠くで聞こえた。千夏は少し困ったような顔で、ちらりと私を見た。

私だって、たくさん練習した。台本は付箋だらけになるまで読み込んだ。それなのに――。その日は、千夏とほとんど口をきかないまま家に帰った。

翌日の係決めで、最後まで残っていたのは照明係だった。「誰かやってくれる人はいませんか」と実行委員が言ったとき、気がつくと手を挙げていた。舞台に立てないのなら、せめて舞台のいちばん近くにいたかったのかもしれない。

初めてのリハーサルの日、私は体育館の後ろにある操作卓の前に立った。渡された照明の計画表には、場面ごとの明かりの色と強さが細かく書き込まれていた。半信半疑のまま、指示どおりにレバーを上げる。

②舞台の千夏にスポットライトが重なった瞬間、私は思わず息をのんだ。ついさっきまで、体育館の床の上でせりふを繰り返していただけの千夏が、光の輪の中で、物語の中の人物になっていた。光が当たる場所と、当たらない場所。たったそれだけのことで、ただの舞台が、別の世界に変わる。レバーに置いた自分の指先が、少し震えていた。

リハーサルの帰り道、千夏が追いかけてきた。

「あのね、美緒」

千夏は、歩道の白線の上を選ぶように歩きながら、ぽつりぽつりと話した。オーディションの結果が出てから、ずっと言えなかったこと。私に悪い気がして、主役に決まったことを素直に喜べなかったこと。

「でも今日、光が当たったとき、思ったの。美緒の明かりの中なら、思いきり演じられるって」私は立ち止まった。ずるい、と思った。そんなことを言われたら、もう、うつむいてなんていられないじゃないか。

「……千夏がいちばんきれいに見える明かり、作るから」

声は少しかすれたけれど、③今度こそ、その言葉は確かに自分の声だった。

それからの毎日、私は台本を、今までとは別の読み方で読み直した。せりふを覚えるためではなく、場面ごとの光を考えるために。夕暮れの場面は、オレンジの光を弱く。別れの場面は、青を混ぜて冷たく。ノートは、光の設計図でいっぱいになった。

本番の日。幕が上がると、客席のざわめきがずっと遠のいた。④暗闇の中で、私は誰よりも先に千夏の動きを追っていた。千夏が舞台の中央へ踏み出す半歩前に、そこへ光を届けておく。せり

ふと、音楽と、光。全部がそろったとき、体育館は確かに、物語の場所になった。

終演の拍手の中で、舞台の上の千夏たちが並んで礼をした。私は操作卓の前から動けないまま、その光景を見ていた。拍手は、私には届かない場所で鳴っている。それでも、⑤胸の中は、不思議なくらい満たされていた。あの舞台を包んでいた光は、私が作った光だ。

片付けのとき、駆け寄ってきた千夏が言った。「カーテンコール、もう一回やりたいくらいだったね」。私は笑って、うなずいた。来年は高校生になる。今度は、どちらの場所を選ぶ。舞台の上か、それとも、光を作る側か。どちらを選んでも、きっと大丈夫だと思えた。

(注) 操作卓(そうさたく)……照明などの機器を操作する装置がまとめられた台。カーテンコール……終演後、拍手に応えて出演者が再び舞台に登場すること。

問1 ①「おめでとう、と言った自分の声が、自分のものではないみたいに遠くで聞こえた」とありますが、このとき的美緒の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 千夏が主役に決まったことにまったく納得できず、選考のやり直しを求めたい気持ちを必死におさえている。

イ 親友への祝福を口にしながらも、努力が報われなかった悔しきで気持ちが追いつかず、現実感を失っている。

ウ 結果をあらかじめ予想していたため驚きはなく、落ち着いて千夏に祝いの言葉をかけている。

エ 工演劇そのものへの興味を失い、オーディションの結果がどうでもよくなっている。

問2 ②「舞台の千夏にスポットライトが重なった瞬間、私は思わず息をのんだ」とありますが、このとき的美緒の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 初めて扱う機材をうまく操作できるかどうか不安で、緊張のあまり体がこわばっている。

イ 光を浴びて別人のようになった千夏との実力の差を思い知らされ、打ちのめされている。

ウ 光の当て方ひとつで舞台が別の世界に変わることを目の当たりにし、心を強く動かされている。

エ 工自分の操作の失敗が本番の舞台を台無しにしかねないと気づき、責任の重さにおびえている。

問3 ③「今度こそ、その言葉は確かに自分の声だった」とありますが、このとき的美緒はどのような思いでいましたか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、舞台、支えるの二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ④「暗闇の中で、私は誰よりも先に千夏の動きを追っていた」とありますが、このときの美緒の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 主役への未練を断ち切れず、光の中で演じる千夏の姿から目をそらすことができずにいる。
イ 操作を間違えることへの不安で頭がいっぱいになり、余裕を失って計画表にしがみついている。

ウ 客席の反応が気になって、観客と舞台とを何度も見比べながら操作している。
エ 千夏が最も輝いて見えるように、自分の役割に集中し、先回りして光を届けようとしている。

問5 ⑤「胸の中は、不思議なくらい満たされていた」とありますが、このときの美緒の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)
ア 拍手を受ける立場ではなくても、自分の光があつた舞台を作り上げたのだという充実感と誇りを感じている。

イ 舞台の上で拍手を浴びる千夏の姿を見て、来年こそは必ず自分が主役になろうと闘志を燃やしている。
ウ 拍手が自分に届かないことにさびしさを覚え、やはり舞台に立ちたかったという後悔をかみしめている。

エ 大きな失敗もなく本番を終えられた安心感から、緊張が解けてぼんやりしている。

問6 本文の内容や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～エの中からすべて選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 「光」の当たる舞台と、光の当たらない操作卓という対比を通して、美緒が自分の役割を見いだしていく過程が象徴的に描かれている。

イ 「歩道の白線の上を選ぶように歩きながら、ぽつりぽつりと話した」という様子の描写によって、千夏のためらいがちな心情が表現されている。

ウ 本文は千夏の視点から語られており、主役選ばれた者の重圧と喜びが物語の中心に据えられている。

エ 「自分のものではないみたいに遠くで聞こえた」声と「確かに自分の声だった」という表現が対比され、美緒の心情の変化が印象づけられている。

オ 物語の大部分は美緒が小学生だったころの回想で構成され、現在の場面は結末にのみ置かれている。

2

問1 ① 次の——部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)
友人と頻繁に連絡を取り合う。(読み)

問1 ② (各2点) 祖父は長年、農業に携わっている。(読み)

問1 ③ (各2点) 勇気をフルって自分の意見を述べる。(書き)

問1(4) (各2点) バスのウンチンを支払う。(書き)

問2(1) 次の(1)・(2)の——部のかたかなを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を答えなさい。(各2点)

物語の続きをソウゾウしながら読む。

ア将来の理ソウを語り合う。

イピアノの演ソウを聴く。

ウ朝の体ソウで体をほぐす。

エ荷物をソウコに運び入れる。

問2(2) (各2点) 毎日の練習のコウカが表れる。

ア授業を終えて下コウする。

イ有コウな方法を考える。

ウコウドウで全校集会を開く。

エ実験に成コウする。

問3 次の文章中の——部ア～カの動詞の中から、活用の種類が下一段活用であるものをすべて選び、その記号を答えなさい。(3点)

「朝早く起きて、図書館で郷土の歴史を調べた。分からない言葉は先生に教えてもらい、ノートに要点をまとめて、夕方には家に帰った。次の日曜日には、友人も図書館に来るそうだ。」

——部: ア起き／イ調べ／ウ教え／エまとめ／オ帰っ／カ来る

問4 次のア～エの文の——部「の」の中から、連体修飾語を作る働きをしているものを一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

ア長い距離を泳ぐのが得意だ。

イ兄の作った模型が入賞した。

ウ秋の空は高く澄んでいる。

エ行くの行かないのと迷っている。

問5 次の文の空欄にあてはまる四字熟語として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

文化祭の企画を考えるために、過去の文化祭の記録を調べ、そこから新しいアイデアのヒントを得ることにした。まさに「——」である。

ア温故知新

イ単刀直入

ウ十人十色

エ大器晚成

問6 (1) N中学校の図書委員会では、十月末の「読書週間」に合わせて発行する「図書だより」の特集記事を作るために、AさんとBさんが、地域の書店で働く田中さんにインタビューをしています。次の「インタビューの様子」を読んで、あとの(1)～(3)に答えなさい。

【インタビューの様子】

Aさん「本日はお忙しい中、ありがとうございます。図書だよりの特集記事を作るために、田中さんのお話を「Ⅰ」と思っています。よろしく願います。」

田中さん「こちらこそ、よろしく願います。」

Aさん「早速ですが、中学生に人気のある本には、どのような傾向がありますか。」

田中さん「そうですね、部活動や友情を描いた小説がよく読まれています。それから最近は、科学の面白さを紹介する新書を手取る中学生も増えていきますよ。」

Bさん「今、科学の新書というお話がありました。読む人が増えているのは、なぜだと思われますか。」

田中さん「動画やテレビで科学の話題に触れて、もつとくわしく知りたくなり、本を探しに来る人が多いようです。入り口は何であっても、本までたどり着いてくれるのは、うれしいことですね。」

Bさん「なるほど。きっかけは動画でもよくて、そこから本につながるものが大切なのですね。」

Aさん「本日は貴重なお話をありがとうございました。いただいたお話は、「Ⅱ」という形で図書だよりの特集記事にまとめたいと思います。」

(1) インタビューの様子の空欄「Ⅰ」にあてはまる言葉として、目上の方への言葉遣いとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)



田中

A

B

図書委員A・Bと書店員の田中さんによるインタビューの場面

アお聞きになりたい

イ伺いたい

ウ拝見したい

エ申し上げたい

問6(2) Bさんは、このインタビューでどのような工夫をしていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア 事前に用意してきた質問を、相手の答えにかかわらず順番どおりに尋ねている。

イ 自分自身の読書体験をくわしく語ること、相手が話しやすい雰囲気を作っている。

ウ 相手の答えの中の言葉を取り上げて理由をさらに尋ねたり、聞いた内容を自分の言葉で言いかえて確かめたりしている。

エ 相手の意見のあいまいな点を指摘して、より正確な言い方に改めるよう求めている。

問6(3) インタビューの様子空欄「Ⅱ」にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア 中学生に人気のある本の傾向と、動画などをきっかけに本にたどり着く読者が増えているというお話を紹介する

イ 書店の売り上げをさらに伸ばすための具体的な方法を提案する

ウ 図書委員のおすすめする本だけを選んで一覧にする

エ 動画やテレビを見る時間を減らして読書をするべきだと呼びかける

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

「自然を守る」と聞いて、どのような行動を思い浮かべるだろうか。木を切らないこと、生き物を捕らないこと、人が立ち入らないようにすること――つまり、自然に手を触れないことだと考える人が多いのではないだろうか。私も長い間、そう思い込んでいた。

ところが、日本の「里山」は、この思い込みを静かにくつがえす。里山とは、集落の近くにあつて、人々が暮らしの中で利用してきた雑木林や田畑、ため池などのことである。かつての人々は、雑木林でクヌギやコナラを切つて薪や炭にし、落ち葉をかき集めて田畑の肥料にした。木は切られても、切り株から再び芽を出し、十数年たてばまた薪になる。人々は森を使いながら、森を絶やさないように付き合ってきたのである。

興味深いのは、こうして人の手が入り続けた雑木林が、多くの生き物のすみかになつていたことだ。定期的に木が切られ、落ち葉がかき集められる林は、地面まで日の光が届く、明るい林になる。その明るさを頼りに、カタクリなどの草花が咲き、花を求めて昆虫が集まり、昆虫をねらう小鳥がやってくる。

だから、①人が雑木林を使わなくなると、そこにすむ生き物たちが、かえつて姿を消していく。薪や炭が石油や電気につけて代われ、雑木林が放置されると、木々は伸び放題になり、林の中は一年中薄暗くなる。明るい地面を頼りに生きてきた草花や昆虫は、生きる場所を失つてしまうのだ。実際、雑木林とともにあつた生き物の中には、里山の衰退とともに数を減らし、絶滅が心配されているものが少なくない。

田んぼも同じである。棚田の水路やあぜは、人が稲作のために作り、手入れを続けてきたものだが、そこはメダカやカエル、トンボといった生き物たちの、かけがえのないすみかでもあつた。

つまり、②里山の豊かな自然は、自然がひとりでに作り上げたものではなく、人の暮らしと自然との長い付き合いが作り上げた「合作」なのである。人が自然を使うことと、自然が豊かである

ことは、ここでは対立していない。むしろ、適度に使い続けることこそが、多様な生き物の暮らす環境を保ってきたのだ。

もちろん、人がいつさい手を触れずに守るべき自然もある。屋久島の原生林のように、人の関わりなしに長い時間をかけて成り立ってきた自然は、そのままの姿で残していくことに大きな価値がある。私が言いたいのは、すべての自然に人が手を入れるべきだ、ということではない。「自然を守る」ことには、「手を触れずに残す」だけでなく、「関わり続けることで保つ」という、もう一つの形があるということだ。

③守るとは、遠くからながめることなく、相手と付き合い続けることでもある。近年、各地で、市民ボランティアによる雑木林の手入れや、使われなくなった田んぼをよみがえらせる活動が広がっている。参加する人々は、自然を一方的に「守ってあげる」というよりも、自然との付き合い方を、もう一度学び直しているように見える。

自然と人間を切り離して考えるのではなく、その間にあった長い付き合いの歴史に目を向けること。里山は、これからの自然との関わり方を考えるための、大切な手がかりを私たちに示している。

(注) 雑木林(ぞうぎばやし)……クヌギ・コナラなど、さまざまな種類の木が混じって生えている林。 棚田(たなだ)……山の斜面に階段状に作られた田んぼ。

問1 ①「人が雑木林を使わなくなると、そこにすむ生き物たちが、かえって姿を消していく」とありますが、筆者はその理由をどのように述べていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア人がいなくなった林では、生き物を捕まえて持ち去る人を見張ることができなくなるから。
イ人の利用によって保たれてきた明るい環境が失われ、その明るさを頼りに生きてきた生き物が暮らせなくなるから。

ウ木が切られすぎて林そのものがなくなり、生き物のすみかが失われてしまうから。

エ石油や電気の使用が広がり、大気や水の汚染が林の生き物に直接の被害を与えるから。

問2 本文で筆者が述べている、「関わり続けることで保つ」自然の例として適切なものを、次のア～カの中からすべて選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア薪や炭にするために、定期的に木を切って利用し続ける雑木林。

イ人の立ち入りを禁止して、ありのままの姿で残す原生林。

ウ世界中の珍しい植物を集めて人工的に造られた植物園。

エ落ち葉をかき集めて肥料にしながら、利用され続ける林。

オ稲作のための水路やあぜの手入れが、生き物のすみかを育んでいる棚田。

カ建物を建てるために木を切り開いて造成された土地。

問3 ②「里山の豊かな自然は、自然がひとりでに作り上げたものではなく、人の暮らしと自然との長い付き合いが作り上げた『合作』なのである」とありますが、これはどういうことですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、人の手、多様の二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ③「守るとは、遠くからながめることなく、相手と付き合い続けることでもある」とありますが、この部分で筆者が述べていることの説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 自然を守るためには、原生林にも里山と同じように人が手を入れて、管理していく必要があるということ。

イ 自然を守るうえで最も大切なのは、生き物に影響を与えないよう、遠くから見守り続けることだということ。

ウ 手を触れずに残すことだけでなく、適度に利用し関わり続けることで保つこともまた、「自然を守る」ことの一つの形だということ。

エ 自然を守る活動は、専門家に任せるのではなく、すべての市民がボランティアとして参加すべきだということ。

問5 本文の構成や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 冒頭の問いかけによって読者の思い込みを引き出し、それをくつがえす形で論を展開している。

イ 実験によって得られた数値のデータを示しながら、主張の正しさを科学的に証明している。

ウ 雑木林や棚田といった具体例を挙げて、「合作」という考え方をわかりやすく説明している。

エ 原生林のように自分の主張が当てはまらない場合にも触れることで、主張の範囲を明確にしている。

問6 本文に述べられている筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 里山を各地で復元していけば、絶滅が心配されている生き物たちは、すべて救うことができる。

イ 原生林のような手つかずの自然よりも、人の手が入った里山の自然のほうが価値が高い。

ウ 自然を守ることに人は人が適度に関わり続けることで保つという形もあり、人と自然の長い付き合いの歴史に目を向けることが大切である。

エ 現代の便利な暮らしを見直し、薪や炭を使っていた昔の暮らしに戻ることが、自然を守る最もよい方法である。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(カッコ内は口語訳です。)(16点)

唐土に、いやしき夫婦あり。餅を売って世を渡りけり。夫、道のほとりにて餅を売りけるに、人の、袋を落したりけるを見れば、銀の軟挺六つありけり。家に持ちて帰りぬ。(中国に、身分の低い夫婦がいた。餅を売って暮らしを立てていた。夫が道ばたで餅を売っていたところ、ある人が袋を落としたのを見ると、中に銀の軟挺が六つ入っていた。夫はそれを家に持って帰った。)

妻、心すなほに欲なき者にて、「我らは商ひして過ぐれば、事も欠けず。この主、いかばかり嘆き求むらん。いとほしきことなり。①主を尋ねて返し給へ。」と言ひければ、夫、「まことに。」とて、あまねくふれけるに、主といふ者出で来て、これを得て、あまりに嬉しくて、「三つをば奉ら

ん。」と言ひて、既に分かつべかりけるが、②思ひ返して、煩ひを出ださんがために、「七つこそありしに、六つあるこそ不思議なれ。一つは隠されたるにや。」と言ふ。「さることなし。もとより六つこそありしか。」と論ずるほどに、果ては、国の守のもとにして、これを断らしむ。(妻は、心が素直で欲のない者で、「私たちは商売をして暮らしているので、生活に不足はありません。この持ち主は、どれほど嘆いて探していることでしょう。気の毒なことです。持ち主を探して返してあげてください。」と言ったので、夫は、「本当にそのとおりだ。」と言って、広く知らせて回ったところ、持ち主だという者が現れて、袋を受け取り、あまりに嬉しくて、「三つを差し上げよう。」と言って、今にも分けようとしたが、思い直して、面倒を起こして礼を渡すまいとするために、「七つあったはずなのに、六つしかないのは不思議だ。一つは隠したのではないか。」と言う。夫は、「そんなことはない。はじめから六つだった。」と言ひ争ううちに、とうとう、国司のもとで、この件を裁いてもらうことになった。)

国の守、眼賢くして、かの主は不実の者、この男は正直の者と見ながら、不審なりければ、かの妻を召して、別の所にて、事の子細を尋ぬるに、夫が申すところに少しも違はず。(国司は、物事を見抜く目にすぐれていて、あの持ち主は不誠実な者、この男は正直な者と見て取ったが、確かめるために、男の妻を呼び出して、別の場所で事情を細かく尋ねたところ、夫の言ひ分と少しも食い違わなかった。)

「この妻は極めたる正直の者なり。」と見て、国の守の判に言はく、「このこと、確か証拠なければ判じがたし。ただし、ともに正直の者と見えたり。夫婦の言葉も変はらず、主の言葉も違はざれば、主は、七つあらん軟挺を尋ねて取るべし。これは六つあれば、別の人のものにこそ。」とて、六つながら夫婦に賜はりけり。宋朝の人、いみじき成敗とぞ、あまねくほめののしりける。(「この妻はこの上ない正直者だ。」と見て、国司が判決に言うことには、「このことは、確かな証拠がないので判定しにくい。ただし、どちらも正直な者に見える。夫婦の言葉も食い違わず、持ち主の言葉も『七つ』のまま変わらないのだから、持ち主は、七つ入っている軟挺の袋を探して受け取るのがよい。この袋は六つ入っているのだから、別の人のものであるう。」と言って、六つとも夫婦にお与えになった。宋の時代の中国の人々は、みごとに裁きだと、口々に褒めたたえたということである。)

(無住『沙石集』による。表記を一部改めた。)

(注) 唐土(もうこし)……昔の中国のこと。軟挺(なんてい)……銀で作られた貨幣。あまねくふれけるに……広く知らせて回ったところ。奉らん……差し上げよう。国の守(かみ)……国司。その地方を治める役人。成敗(せいばい)……裁き。判決。宋朝(そうてう)……中国の宋の時代。

問1 ②「思ひ返して」を、現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。(4点)

問2 ①「主を尋ねて返し給へ」とありますが、妻がこのように言ったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア 拾った銀を持ち続けていると、罪に問われて罰を受けるのではないかと恐れたから。

イ 持ち主に返せば、お礼として銀の一部を分けてもらえるだろうと期待したから。

ウ 自分たちは商売で暮らしていけるうえに、銀を落とした持ち主がどれほど嘆いているかと気の毒に思ったから。

エ 工夫が拾った銀を家に持ち帰ったことを恥ずかしく思い、人に知られる前に手放したかったから。

問3 国司が下した判決の理由を次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、現代語で十字以上、二十字以内で書きなさい。（4点）

問4 次は、この文章を読んだあとのAさんと先生の会話です。空欄にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

【会話】

Aさん「持ち主は、最初は『三つを差し上げよう』と言っていたのに、途中で言うことを変えてしまいましたね。」

先生「そうですね。国司はその不誠実さを見抜いたうえで、確かな証拠がないという前提に立つて判決を下しています。この裁きが『いみじき成敗』として人々に褒めたたえられたのは、なぜだと思えますか。」

Aさん「――一からだと思います。」

ア 双方の言い分をそのまま認める形をとりながら、うそをついて礼を惜しんだ主には何も与えず、正直な夫婦が報われる結果にした

イ 厳しい取り調べを行って動かぬ証拠を集め、うそをついた主にきびしい刑罰を与えた
ウ 軟挺をいったん国が預かることで争いをしずめ、双方が納得するまで何度も話し合いをさせた

エ 工夫婦と主とに軟挺を三つずつ分け与えて、どちらの側にも不満が残らないようにした

（以上で問題は終わります。）